農 林 業地域最前線レポート(147)

広葉樹を「学び合う」学校が開講

～岐阜県飛騨市　赤堀　楠雄（林材ライター）

受講生と講師が意欲あふれる時間を共有

岐阜県飛騨市が今年9月に開校した「広葉樹のまちづくり学校」の第1回講座（9月24、25日）と第2回講座（10月22、23日）を取材した。

同市では5年ほど前から「広葉樹のまちづくり」に取り組んでいて、広葉樹材の活用を進めるためのさまざまな事業を展開している。同学校はその一環で、来年2月まで毎月1回、連続2日間の講座が計6回開催される（来年度以降も継続開催の予定）。森林環境譲与税を活用して行われるもので、受講料は無料。運営主体は、森林を活用した地域づくりのコンサル業務を展開している(株)トビムシ（東京・六本木）。同社は、飛騨地域産広葉樹のプロデュースを手掛ける第3セクター・飛騨の森でクマは踊る（ヒダクマ）の設立にも参画している。また、岐阜県立森林文化アカデミーも協力しており、同校の教員がいくつかの講座を担当している。

カリキュラムは、森づくりから広葉樹材の流通、製材をはじめとする各種の加工、家具木工品などの利用、商品開発等々と多岐にわたる。県外4名を含む市内外の家具・木工関係者、製材業者、林業従事者、建築・設計従事者、土木建築業者など20名が受講しており、それぞれが森や木に関わって仕事をしているプロフェッショナルということもあり、学びの意欲は高い。やはりその道の専門家である講師陣に向けて発せられる質問も、例えば木工作家の講師には材料の厚さや治具の種類・活用方法を尋ねたりと具体的で、本質を学び取ろうという姿勢が露わになる。講師にもそれが伝わるから、前のめりになる。これはお互いに楽しく、刺激を受けるだろうなと、傍で見ていてうらやましくなった。

講師の作品で広葉樹利用の可能性を検証

第2回講座が終わった23日の夕方、森林文化アカデミーで木工を教えている久津輪雅教授と渡辺圭講師が木工用の材料を仕入れに、市内唯一の広葉樹専門製材工場である(株)西野製材所（西野真徳社長）に立ち寄るというので、後から追いかけて材料選びに立ち会わせてもらった。

ふたりは学校運営の協力者の立場としてだけでなく、「自分の勉強にもなるから」（久津輪氏）と、第1回からフル参加していて、広葉樹施業や木工、製材などの講義に立ち会うちにいろいろと思うところがあったらしい。渡辺氏は12月の第4回講座で、久津輪氏は来年1月の第5回講座でそれぞれ講義を担当することになっているのだが、その際に飛騨市産広葉樹を使って自ら製作した木工品を持参し、受講者とさまざまな検討をするつもりだというのである。渡辺氏はその材料選びをするのだと厚さ21㎜に引いたナラ材の物色をはじめた。久津輪氏も、この日は別のプロジェクトで利用するクリ丸太を仕入れに来たが、後日、市内の現場から出材される丸太を引き取り、講義用に椅子を制作するという。

渡辺氏が選んでいる板材は、曲がりが著しく、割れも少な

このページは農業・林業それぞれの専門家が交互に執筆し、農山村の実情に迫ります。今号は「林」の視点です。

からず入っていて、どう見ても素性の良い丸太から挽いたものだとは思えない。制作するのは小型のキャビネットで、それとは別に、所有しているロシア産のナラ材でも同じものを制作し、講義では双方を比較するという。「原価や手間、仕上がりなどを受講者と一緒に検証しようと思うんです」と渡辺氏。それは非常に興味深いことだが、受講者とはいえ、同業のプロである木工職人に作品を吟味させるというのだから、それなりの覚悟も必要だろう。だが、渡辺氏は「ええ、もちろん緊張はします。でも勉強になりますし」と事もなげに言うのである。

キャビネット用の材料を選ぶ渡辺氏（左）と西野社長（中央）、久津輪氏（右）

製材所が協力しなければ前に進めない

それにしても、こういう欠点の多い材料を挽くというのは、製材所としてはどうなのか。西野社長に丸太の来歴や製材の経緯を尋ねると、これは広葉樹のまちづくり事業の一環として市が伐採搬出費を負担して出材された丸太を引き取り、製材・乾燥を施したものだという。丸太の代金はかかっていないが、製材・乾燥コストは持ち出しで、今回、渡辺氏が買い上げることでようやくその経費を回収できるわけだ。

こうした材料を西野社長は何枚も在庫していて、製材所としては負担だろうとつい尋ねてしまったが、それは愚問と言うべきもので、「市内でただひとつの広葉樹専門製材であるウチがやらなきゃ、『広葉樹のまちづくり事業』が終わっちゃうじゃないですか」と返されてしまった。

飛騨市の広葉樹資源は航空レーザー測量の結果、胸高直径が平均26㎝程度とまだ細く、これから良質な資源を育成していくことにしているため、間伐で出材される材の品質にも多くを期待することはできない。そうした状況下で、丸太のえり好みをしていたら、確かに「広葉樹のまちづくり」はまったく進まないのである。「製材して『こういう材料がある』とアピールすることが、作家さんたちユーザーが用途開発に取り組んでくれることにつながるんです」という西野社長の説明にはうなずくほかはなかった。

実は西野社長は受講生のひとりでもあり、第1回と第3回では製材の講義も担当する講師のひとりでもある。11月の第3回講座の自身の講義では、さまざまな欠点要素のある丸太を実際に挽いて見せ、製材品としての品質を受講生に検証してもらうことを考えているという。「受講生のレベルが高いので、そこまでやらないと（受講生のニーズに）追いつかないじゃないですか」と前のめりな姿勢を見せる。

聞けば、久津輪氏も渡辺氏も西野社長も、もともとこうした講義内容を考えていたわけではなく、飛騨市やトビムシにここまでのことを頼まれたわけでもないという。市では、この学校を「『学び合い』の場にしたい」としているが、どうやらその目論見通りの展開が期待できそうだ。